

「義務教育というお金の使われ方」

福岡市立和白丘中学校

米光 美心

中学三年生になり、進路について調べ始めると、公立や私立、県立等高校にも色々な種類があることが分かってきた。どう違うのか調べるうちに、今までは気付かなかった「無償」という単語に目がいくようになった。振り返ってみれば、この九年間、疑問も持たずに毎日学校に行き、学年があがればもらう教科書で勉強してきた。高校受験をきっかけに見えてきた、学校でのお金の使われ方について、調べてみることにした。

国税庁のデータによれば、現在、日本の公立の小学校では一人当たり年間約九十七万五千元、中学校では百十二万二千元、全日制の高校では約百六万三千円の税金が使われており、その他にも、校舎の改築や備品の購入等で税金が使われているようだ。ここまでたくさんの税金が私たちのために使われているのは、日本国憲法で、小中学校の九年間が義務教育となっていることや、公立高校の授業料は徴収しないことなどが定められており、教育を受ける権利が尊重されているからだと分かった。そのため、憲法や法律の内容が違う他の国では、教育のために使われる税金の割合にも違いが出ており、開発途上国では特に、教育予算の多くが教員の給料にあてられる傾向にあるため、学生一人に対する政府の支出額自体が先進国と比べて低くなっているようだ。

明治時代から本格的に行われるようになった日本の国民教育は、百年以上が経った今でも、変わらず重要視され、大切にされており、その思いが今日の教育費等の無償化、という形で私たちに伝わってきている。今回、世界の教育状態を調べるうえで、識字率というものを知った。十五歳から二十四歳の若者で、文字の読み書きができる人の割合を表したものだ。それによると、世界の平均が九十一・五パーセントなのに対し、日本はほぼ百パーセントに近い識字率を保っているとのこと。読み書きができて、人と文字でコミュニケーションができることの凄さを知ることができた。

私の母は、小学校の教員をしているが、その給料も税金から支給されていることが分かった。教育のために集められた税金の七割以上を使って、私たちは毎日を学校で過ごしている。これからの学校生活では、そのことを心に留めて過ごさなければいけないと感じた。また、これからの日本を支える立場としても、志望校に合格し、私の夢をかなえて、より良い社会にしていきたいと思う気持ちが強くなった。